

小児画像診断部

1. スタッフ（平成24年4月1日現在）

部長（教授）相原 敏則
 病院助教 古川理恵子
 八神 俊明

八神 俊明
 日本医学放射線学会放射線科認定医 古川理恵子

2. 小児画像診断部の特徴

医療が臓器別に専門分化が進む現在、全身を診る唯一の診療科が小児科であるが、私たち小児画像診断部もそれにならい、全身の疾患を画像診断の対象としている。その特徴を一言で言えば「適応から判断し検査計画の立案から始まる画像診断」となる〔注1〕。そのために、附属病院本院では放射線科医が担当していない超音波検査も装置を自前で所有し引き受けている〔注2〕。また、同じ理由（「適応から判断し検査計画の立案から始まる画像診断」が小児画像診断部の基本的な考え方）から、院外の医療機関からの検査だけの施行を目的とした依頼はお受けしていない。

小児画像診断部は自前のカンファレンス室を有している。JUMP（電子カルテ）、PACS（画像診断電子保存供覧システム）を大画面プロジェクター（DICOM対応）で映写し、出席者に供覧して議論することが可能である。このカンファレンス室では小児科（頻度は週2回）、小児外科（同週1回）、尿路（関係する診療科は小児科と小児泌尿器科。同週1回）の定期画像診断カンファレンスを開催し、依頼医との関係が「オーダーと読影レポートの往復」で終わらない工夫をしている。

小児虐待事例についての司法捜査への協力を積極的に行っていることは小児画像診断部の特徴の一つに挙げられると思う。昨年は検察庁・警察への捜査協力が3件あった。うち1件について検察官の求めに応じ鑑定書を作成した。これらとは別に名古屋地方裁判所に証人として相原が出廷し、証人尋問を受けた。

注1：

詳しくは子ども医療センターホームページの「小児画像診断部」をご覧ください。（学校法人自治医科大学HP→自治医科大学附属病院→とちぎ子ども医療センター→診療科等のご案内→小児画像診断部）

注2：

小児画像診断部放射線科医が、超音波検査が必要と判断した症例に限って検査をお引き受けしている。そのため予約枠は開示していない。

認定医

日本医学放射線学会放射線科専門医 相原 敏則

3. 診療実績・クリニカルインディケーター

（2011年1月1日～12月31日）

1) 検査件数（小児画像診断部での撮影のみ）

単純X線写真	13,202 [注3]
造影検査（X線透視）	372
MRI	1,545 [注4、注5、注6]
超音波	597

注3：

集計の元となるデータはRIS（放射線情報システム）から得ている。RIS設計上の制約があり、撮影対象が小児でありながらオーダー・エントリーが子ども医療センターからではない撮影（例えばNICU/GCUから依頼されるポータブル単純X線写真）は、この数字には含まれない。したがって、単純X線写真の読影件数〔2〕はこの数字（13,202）が分母ではない。

子ども医療センターに設備を持たないCT検査、核医学検査も同じ理由で小児を対象とした検査件数を抽出することができないため、ここでは数字を示すことができない。

注4：

鎮静を試みたが入眠剤せずMRIを行った検査実績を下に示す：

鎮静を試みた検査件数	598件（小児患者の43%）
入眠剤検査が中止（のべ）	91件
中止割合	15.2%
検査中止までの平均拘束時間	138.1分（2.3時間）
検査中止までの最大拘束時間	300分（5時間）

注5：

麻酔科医による全身麻酔下でのMRI 9件

注6：

内、附属病院中央放射線部からの成人患者 155件

2) 読影件数

単純X線写真	4,099
造影検査（X線透視）	131
MRI	1,205
超音波	597
CT	847
RI検査	178

3) 画像診断カンファレンス

(会場：小児画像診断部カンファレンス室)

小児科	月曜、木曜12：45から
小児外科	月曜16：00から
尿路（小児科、小児泌尿器科）	火曜18：00から
小児整形外科	月曜17：30から
附属病院放射線科	月曜17：00から

これら小児画像診断部で開催するカンファレンスの他、

小児科新入院患者カンファレンス（NPC）

火曜、水曜、金曜 8：15から

NICU担当医との画像診断カンファレンス

金曜12：30から

のカンファレンスに出席している。

この他、問題となる症例が現れるたびに随時関係診療科との間でカンファレンスを持っている。

4. 事業計画・来年の目標等

①CTの新規導入

子ども医療センターでは、その性格上重症患者が増加することは避けられない。院内での搬送に伴う患者の負担を軽減すべく、CTの導入を目指して予算要求している。

②MRIの更新

子ども医療センター開院の際に導入したMRIが稼働開始後5年の時間が経ち、循環器領域やMRスペクトロスコピーなど、依頼診療科の需要に応えることができない検査領域が広がっている。更新を目指し、その準備に入った。